季刊
諫早通信
第39号
平成26年2月1日
野呂邦暢
顕彰委員会発行

〔野呂さんが文学者仲間に出していた手紙は、「諫早通信」といわれていた。〕

野呂文学への誘い

滝川(左)、納所(右)、神田川豊橋
昭和36年10月13日

滝川義人氏提供

野呂邦暢の略歴
本名　納所邦暢
昭和十二年(一九三七年)生。
昭和三十一年　諫早高校卒。
昭和四十九年　第七十回芥川賞受賞。
昭和五十五年五月七日
享年四十二歳で急逝。

諫早をたずねて

小山内(おさない)恵美子

長崎で発行されている季刊誌「樂(らく)」(イーズワークス刊)の編集にライターとしてたずさわっている。「長崎の本棚」と題する特集のなかで野呂さんのことをとりあげることになり、カメラマンとともに秋の深まる諫早をたずねた。

車で長崎バイパスに入り、しばらくすると視界が開けてくる。坂の街に暮らしているためか、空の広さにまず開放感をおぼえ、写真で見たことのある野呂さんの顔と本明川の河口の風景とが頭のなかをよぎる。街の中心を川が流れる風景が似ているからか、いつ来ても関東平野のかたすみにあるふるさとを思い出す。

自宅跡や川べりの風景を撮影したあと、この通信の編集長を務めておられる西村房子さんとともに野呂さんの墓所に向かったのだけれど、付近は路地が入り組み、詳しい場所を調べていなかったこともあって、なかなか見つけられずに同じ道を行ったり来たり。冷たい雨がぱらつき、空にはくっきりとした虹があらわれ、十一月下旬の昼下がり、野呂さんに会いに行くまでの時間は、数分にも数時間にも感じられるふしぎなひとときとなった。やっとたどりついた納所家のお墓は小さな丘のうえにあった。野呂さんの担当編集者だった文藝春秋の豊田健次氏による碑には「菖蒲忌はわが心に在り」と記されていた。

いまの諫早の風景を野呂さんならどんなふうに眺め、どんな言葉で記したのだろう。撮影するカメラマンにつきそいながら、思いをめぐらせた。乾いた大気や道端の水神、河口へとつづく土手の道、木からぶらさがったカラスウリの朱色。冷たい風に吹かれ、水際を歩く白鷺に見とれながら、この地に暮らした野呂さんのことをまた思った。

西村さんが半世紀にわたって営まれ、五月に閉店した洋装店「ジェンヌ」のあった場所を帰りに通りかかった。以前訪ねたとき、ツタのからまる建物がとても素敵で印象に残っていたが、すでに取り壊されていた。近所に住んでいた野呂さんは、新刊が出ると本を手に自転車でやってきたという。野呂さんが親しんだ風景がまたひとつ街角から消えてしまった。

夕刻、空は一面、紅色に染まっていた。野呂さんならこの空をどんなふうに……と思い、西へと車を走らせる。胸の奥にじんわりとあたたかいものがこみあげ、それは夜眠りにつくまで、消えなかった。

略　歴

一九七五年神奈川県生まれ。津田塾大学学芸学部卒、元新聞記者。
二〇〇八年より長崎市在住。二〇一二年一月、小説「おっぱい貝」で第四十二回九州芸術祭文学賞受賞。
小山内恵美子様は芥川賞作家　青来有一氏夫人であります。(編)

思い出の記 補遺

滝川 義人

高校三年の秋（昭和三十年九月）、村岡と和田を介して知り合った納所が、貸していた雑誌を返しに来た。生憎その日は、小学五年生の時の友人である石井君が二階に居た。階段下の土間で応対したのだが、納所はなかなか帰らない。石井君とは七年ぶりの再会で、遠方から来ているので、私はこちらと話をしたい。その雑誌には投書がのっていた。目覚し時計に塗ってある蛍光塗料の放射性分で、頭が禿げるのを心配する男の相談事であった。この男の悩みを茶にして笑ったりしたが、その内に話題が尽きて、気まずい沈黙が続いた。立ったままの納所が帰ったのは、三十分もたってからであった。石井君は優れた人物であったから、二人を引合わせておけばよかったと、後になって悔んだ。

高校時代納所とは七～八回しか話をしていない。それでも本人の才能は判った。通り一遍の考え方をしないのである。「ロビンソン・クルーソーは、イギリス海洋帝国主義の象徴」と言ったことがある。デフォー作の「ロビンソン・クルーソー」なら小学生の時に読んでいるから、内容は知っている。海洋といわれても、こちらには海洋冒険小説の一種であり、児童図書の範疇でしか考えていない。帝国主義と指摘されると、成程と思う。南海の島に漂着した主人公は、創意工夫の才を発揮して食糧を確保し、原住民のひとりにフライデーとイギリス名を与えて従僕とし、イギリス生まれの自分に合った環境をととのえていく。デフォーが生きていた十八世紀前半は、ヨーロッパ列強が海外へ進出し、盛んに植民地をつくっていた時代である。

しかし、その着想にはどこかで耳にしたような、評論家風なところがあった。戦争で日本人が変ったかどうかで議論した時も、私は納所の主張が、日本の社会風土や企業精神と結びつけて考察した飯塚浩二編「日本の軍隊」（昭和二十五年刊）の論調に似ているな、と考えながら応戦していた。

評論家風かどうかは別として、高校生の頃から、納所は我々がすぐには思いつかない意外な着想をした。私が太刀打ちできるのは、読書の量だけである。一番読書量があったのは大学生の頃で、学業の合間にチャンドラーや、アンドリュー・ガーブ或いはジェームス・ハドレー・チェイスなどをペーパーバックで読みまくっていた。そして、夏に帰省すると諫早公園の木陰に陣取り、自分の読んだ本の新奇性を披露して、納所を煙にまいた。

秋になると納所が上京し、諫早学生寮へ来た。大学四年の秋。納所はいつものように東京へ来た。二人で何を話していたのか記憶にないが、神田川にかかる豊橋を渡っていると、「滝川は散文的だ」と言った。私は「平凡で、着想に乏しく、深みのある解釈をしない」意と理解した。しかし自分にも自尊心がある。「それで結構。自分には具体的観察力と好奇心がある。これが俺の武器だ」と言い返して、自分の劣等感を補償した。

納所が学生寮に来た最後の年は昭和三十六年十月。先述のように私が大学四年生の時である。納所が撮影した写真が数枚残っているが、写真の裏には、十月十三日㈮上京、十六日東京を去る、池袋で開催中のクレー展へ一緒に行ったとか、大枚二万円を懐にボストンバック二個分の古本を買い込むなどと、メモ書きがしてある。学生寮に来た納所は、私と議論した。そして、（作品か人物評伝か忘れたが）何かを話題にして解説を始めた時、私がそんな話ならユングも書いていると言い返した。不意打ちをくらった納所は、がっかりした顔付きになった。

ユングの論文は、たまたまユング全集にのっていただけのことで、私が特に注目して読んでいたわけではない。ユングの件からフロイトやアドラーの精神分析学の話になり、挙句の果てはヤスパースの大著「精神病理学総論」にみられる、緻密で理路整然とした論理を大いに称えて、納所を面食らわせた。

納所は、帰る段になって、借りていく本を積み上げた。見ると全三巻の「総論」もある。私の愛読書で、手許にないと困る。それも持っていくのかとたずねると、納所は済ました顔で、そうだと答えた（しかし、ヤスパースの本だけは、すぐに送り返してきた）。

どのような事情があったのか判らないが、納所は城見町の家を出て、八坂神社の近くにある下宿屋へ移った。夏に一度だけ行ったことがある。蒸し暑い畳の部屋で、納所は扇風機をまわして坐っていた。その夜は、昭和通りの東側にある料亭で食事をした。帰りがけ、杉谷おこしの近くで小さい古本屋に立寄ったが、納所は店頭におかれた少年雑誌を数冊買った。漫画雑誌である。部屋に戻って夕食時の話題の続きをしていると、納所の話し方がスローテンポになり、呂律がまわらなくなってきた。翌朝わけをきくと、睡眠剤を服用し目が覚めるとすっきりさせるためカフェイン剤をのんでいるという。このようなやり方が体にいい筈はない。

はたから見ると惨憺たる状態である。しかし私には、納所がへこたれているとは思えなかった。虚勢をはっているようでもない。村岡や和田に自分の心境を素直に話したのかどうか、判らない。私にはいつも平常心で接し、弱音を吐いたことはない。不満をもらしたこともない。逆に、自分の難しい状況を笑いとばした。話は前後するが、歩行中病気で倒れた時、手紙を寄越したことがある。それは、あたかも第三者が倒れた自分をのぞきこんでいるような描写文であった。

納所は或るタイプのイギリス人が好きだったようだ。独りで居る時、不精髭をはやし、身心共にボロボロの状態にあるのに、人前に出る時は、寸分のスキもない服装で現われ、何事もないように平然としている。そのようなイギリス人像である。

それに対して私はトブルク戦の話をした。第二次世界大戦時の北アフリカ戦線である。ドイツ軍の攻撃で、或る英軍陣地が午後には全滅という状況にある時、指揮官の英軍将校は、朝に普段通りに髭を剃り、身支度をするという逸話で、納所は我が意を得たようにうなずいた。

自分の日常を強情にそして平然として守る。自分の世界を既に築きあげていた納所は、諫早という、どちらかといえば孤立した場所で、家庭教師で糊口をしのぎながら、文学の修業をした。しかも体が丈夫ではなく、将来の展望が開けているわけでもなかった。しかし、少なくとも私に対しては平然としていた。

私自身展望が開けているわけではなかった。勉強しているのは、欧米の亜流であり、自分がこの先どうなるかも判らない。私は外国へ行って、好奇心のおもむくままに行動し、焦燥感を鎮める道を選んだが、納所は、自分の世界の中で自分自身を熟成させていった。

東京在住

昭和三十一年諫高卒業
早稲田大学第一文学部心理学専攻
イスラエル大使館チーフインフォメーションオフィサー
㈳日本イスラエル親善協会 理事

野呂邦暢の文学世界（三十九）

『草のつるぎ』

エッセイスト　中野章子（しょうこ）

野呂邦暢が「草のつるぎ」で第七十回芥川賞（昭和四十八年下半期）を受賞したのは昭和四十九年一月のことである。「壁の絵」（昭和四十一年）、「白桃」（昭和四十二年）、「海辺の広い庭」（昭和四十八年）、「鳥たちの河口」（同）に続いて、候補にあがること五回目での受賞であった。今年は受賞から四十年になる。当時のことは豊田健次氏の『それぞれの芥川賞　直木賞』（文春新書）に詳しいが、この時の審査員は大岡昇平、滝井孝作、井上靖、中村光夫、永井龍男、丹羽文雄、吉行淳之介、安岡章太郎、舟橋聖一の九人であった。全員がすでに鬼籍に入ったことを思うと、四十年は遥か昔、という気さえする。

受賞作を掲載した「文藝春秋」昭和四十九年三月号には各審査員の選評も載っているが、これを読むと「草のつるぎ」がどのように評価されたかがわかる。このときは「月山」の森敦とのダブル受賞だったが、他の候補作も水準が高く、とくに日野啓三の「此岸の家」が最後まで選考に残ったとある。野呂の「草のつるぎ」は、「これまで幾度か候補になり、いまひと息というところで、その過度の技巧性が邪魔をして授賞を逃している。こん度の作品は、これまたいくつかの作品に潜在的状態にあったテーマ、つまり自衛隊員の生活が、正面から書かれている。訓練、演習、営内外の生活などが、これまで旧軍隊を書いた多くの小説よりも、現実性を持って書かれている。長編小説の書き出しのような印象を与えるくらい、延び延びと書かれているのに感心した」という大岡昇平の評に代表されるように、作品の持つ明るさや健康さが好感を持って受け入れられたといえる。安岡章太郎は「素直でいい作品だった。同じ作者の前回、前々回の候補作よりも遥かにすぐれている。素直になるというのは、この作品の場合、勇気のいることであっただろう。」と評しているが、素直になって体験したことを書け、と野呂にアドバイスしたのは他ならぬこの安岡章太郎なのである。

十九歳から二十歳になる年に体験した自衛隊での生活を書きたいと思いながら、長いこと野呂が書けなかったのは、彼のなかにこだわりがあったからだろう。「つまらない正義感を捨てて、そこで見た物事を自由奔放に書けばいい」という安岡章太郎の助言で肩の力を抜くことができた野呂は一気に「草のつるぎ」を書きあげたという。

この作品で印象的なのは若い隊員たちが語る言葉である。「どぎゃんしゅう」「のさん」「何でこげんとこに這入ったな」「俺あ、きゃあ萎えたばい」等々に、九州各地から集まった若者たちの無骨な顔が浮かぶようだ。彼らは入隊前は農夫であったり工員、漁師、坑夫であった。様々な土地から様々な経歴を持つ若者が集まっていたのである。野呂はのちにこの時の体験を貴重なものとして、「自衛隊は自分にとってある意味大学に等しいものであった」と語っている。

発表当時、前回の候補作「鳥たちの河口」とずいぶん作風が異なると思ったものだが、そして審査員たちもそう評していたが、いま読み直してみるとやはり情景描写に光るものがあり、のちの作品（『諫早菖蒲日記』など）につながる抒情性がある。これは入隊直後の教育期間を書いたものだが、このあと配属された北海道千歳での隊員生活を「冬の砦」に書いたあと、野呂は再び自衛隊をテーマとする作品を書くことはなかった。これはすぐれた青春文学である。「棕櫚の葉を風にそよがせよ」や「一滴の夏」など、野呂は自分の青春時代を繰り返し書いているが、「草のつるぎ」はその頂点にある作品といえるだろう。

京都在住

〝諫早通信へのお便り〟①

◎「諫早通信」三十八号有難く拝受致しました。

このたび〝野呂邦暢小説集成全八巻〟刊行企画偏（ひとえ）に通信刊行の西村編集長はじめ皆様のご支援の成果、野呂さんは文章に依って元気に生きてご活躍!!　全巻書棚に揃えます。

詩人　八女市矢部村飯干　椎窓　猛

◎「野呂文学を読む会」ルポを図書館長さんが書いておられますが、音読は素晴らしいですね。明大の齋藤孝氏ではないけれど。最近やっと気付かされました。表紙の記念写真は皆さん良い顔をされていて撮影者の腕前が大したものなのか……乳井さんのエッセイ欄の写真をこれにして欲しいです。

東京都世田谷区桜　土方　知己　草々

◎「諫早通信」三十八号有難うございました。読み応えのあるエッセイが多く感激しながら目を通しました。雲太郎先生の同人であった高校の先輩木下和郎の奥様の文には胸を打たれました。又「野呂文学を読む会」が定期的に行われてる事を知り凄い事だと思います。「野呂邦暢小説集成」を子供達に残す為に揃えたいと思っています。

真崎町　医家　嘉村　末男

◎諫早医師会保健文化賞おめでとうございます。三十八号寺田さんのルポ、会の雰囲気を良く伝えていると

玻璃の輝き

―野呂邦暢氏を偲ぶ―後編

木下健枝（きのしたたけえ）
（一九三二年　佐世保生）

野呂氏は、『諫早菖蒲日記』のあとがきに、次のように記しておられる。

百二十年前、諫早藩鉄砲組方の侍たちが砲術を学び、その術を口外しないこと、また奉公に懈怠なきことを誓って署名血判した誓紙もあった。血の痕は色褪せ、薄い茶色になっていた。藩士たちの名前は諫早で親しい姓名である。私の親戚知人の先祖と思われる姓も見られた。三年前のことであった。奉書紙にしるされた薄い血の痕に鮮やかさを甦らせることが私の念願であったのだが、それが本書によってかなえられたかどうか。

この思いこそ、長い間、この世から消えてしまったものを忘れかね、哀惜し続けてきた私の思いでもあったと、野呂氏をひどく近い方のように感じたものである。

戦死した長兄の遺品は、日記の他に、一冊の「Hämogram nodit」があった。数ケ所に塗抹不良の文字が散見する。一枚一枚、何回か目を通すうちに、あるページの裏側に、鉛筆でうすく書かれてある文字に気付いた。

昭和一八年五月二二日、キスカ島撤収作戦に出撃前後の、伊号第二潜水艦乗組員の血液集計表であった。

七月八日採血の分。八月二三日採血の分。と、続いている。SやLなどの記号と、集計の数字のみである。数ケ所にしみている血液のあと。

艦の中のねずみが落ちはじめるまでの長い潜航と酸素の欠乏に耐えたと聞く、キスカの戦歴。およそ三ケ月におよぶ戦いであった。

乗員の体をいとおしむ思いで、そのノートを掌で幾度もなでさすった。

『失われた兵士たち』に、野呂氏が引用してくださった兄のたよりには、一八年七月八日のスタンプがある。（七月十五日受）

キスカ戦第一期に出撃後、再びキスカへ向けて出撃の時のたよりであった。

さりげない別れのたよりながら、この一通をえらび、掲載してくださった野呂氏のあたたかさを、今さらながら思うのである。

私は、野呂邦暢という一人の作家にお会いすることによって、長い間ひきずっていた私の中の戦争や、一家の衰退の姿を、いつまでもめそめそと語るのでなく、残すものは夜空の花火のように、きわやかに残し、閉ぢるべきノートはしっかりと閉ぢて、終わりとすることが出来るような気がする。

野呂氏が戦史を手がけられたとき、〝実戦を知らぬ若ぞうが何を言うか〟と言う一部の批判があったのも事実であるという。兄の戦記をお願いした私ですら、それは、野呂氏の冷徹な作家魂の故かと感じた程であった。

しかし、今は、なぜ野呂氏が広範な―戦争文学試論―を書き残すことが出来られたのかわかるような気がする。

大戦にかかわった世代として、野呂氏は戦争を肌で感じられたが、実戦に参加したり、全身がその渦中にあった世代と、年齢的にほんの少しへだたっておられた。

すなはち、戦争の渦の中心にいた世代と、戦争を知らない世代の接点に生きておられたのである。

ひるがえって考えればそのことは、十分に、正確に、世代の悲劇として戦争をとらえ得る歴史家としての精密な目をも持ち得ることであった。

それは、歴史小説を手がけられ、また、雑誌『邪馬台国』の編集にたずさわられたことにおいても頷けるであろう。

野呂さんの愛された諫早の町に七回目の春がめぐって来ようとしている。二月の川風は冷たい。

おもいかねいもがりゆけばふゆのよのかはかぜさむみちどりなくなり

『諫早菖蒲日記』に引用なさった歌をそっと口ずさんでみる。

つのぐむ葦がいっせいに川上の方へ吹きなびくのが見える。

略　歴

諫早市小長井町大峰一一二
故木下和郎夫人
県立佐世保北高校卒
長崎大学学芸学部（現教育）卒
旧文芸誌『岬』同人
短歌結社『心の花』会員
木下和郎
「河」「岬」同人

思って読みました。

下大渡野町　山本　正毅（まさたけ）

◎「諫早通信」三十八号有難うございます。「小説集成」第二巻も先日入手しました。馴染みのないタイトルが混じり興味をそそられます。表紙に大きく漢字一文字が入っていて、（おそらく著者の筆跡？）面白いと思いました。次号以下どの漢字か大体予想がつきます。野呂さん待望の全集は読書の秋に又とない贈り物です。

長崎市　五島町　宮崎　継宣

◎諫早通信有難うございました。今回も又、執筆者に新しいお名前が増えそれにつれ紙面の幅が広がっていく感じで味わい深く読みました。野呂さんの作品集を少しずつ読み進めて思うのは彼の作品はストーリーを追うものではなく文章を味わうものだという事です。戦争の場面さえ文章に魅かれます。付き合う程に味わい深くなるのは作者の人柄そのものにも通じる様で……次号を楽しみに。

栄田町（諫八回）田中　文子

◎三十八号有難く、すぐに拝読。木下健枝様の御稿心に深く沁みます。木下和郎さんの御名懐かしく、お顔を思い出しております。諫高文芸誌「緑の星」を創った方ですから。「人間としての冷徹さ」は作家野呂さんならずとも、あの時代を越えた者にはあると思います。作家として表出したからこそ命短くなさり、自覚だけの私は長らえているというこ

石斧を手みやげに

詩人　高野　義裕
（一九四七年生・久留米在住）

「明日、いらっしゃい」
そういって電話は切れた。
私は国鉄久留米駅から列車に乗り、鳥栖で乗りかえて、諫早へおもむいた。三十五年以上も前、初めて訪れた肥前の小さな町は、くもり空のもと、あまりパッとしない木造駅舎に象徴されるような静かな土地であった。作家の自宅のある仲沖町まで歩いていった。すぐにわかった家の玄関先で初対面の挨拶をかわし、部屋に招じ入れられた。初めて相対するプロ作家、それも花の芥川賞作家なのである。
「これは手みやげです」
そういって私がさしだした手造りの石斧を、
「おお、これはいい。これはとてもいい」
野呂さんは手にとり、挨拶のために顔を見せておられた夫人と二人、互いの手をからめあわせるようにためつすがめつ検分、鑑賞された。木の柄に直角に石を革ヒモでゆわえた手斧は、石器時代の狩人が腰にさげている武器を想像してもらえばよい。石の刃部をカミソリのように研ぐのに相当の時間がかかったはずだ。作家はしきりにそのことを称嘆し、空中で軽くふりおろす仕種をされた。
あれこれの雑談のあと、話は当然文学のことへと。
「小田実が、草のつるぎを自衛隊のPR小説だといっておりましたが」
「どこでそんなことをいってましたか」
「週刊誌です」
「うーむ」
私は畳の上にじかにおかれたサントリーリザーブをコップについで、自分でオンザロックをつくり、ガラス小皿にもられたツナを割りばしでつまみながら、約束の一時間がくるのを気にしつつしゃべった。
「高野さん」と、野呂さんがこの日一番力をこめて忠告なさったこと。「文學界に全国同人誌評というのがあるでしょう。あそこでほめられてベスト5に入ると、そこだけでとりあげられるような作品しか書かなくなる、そう編集者はいうんです。あなたもさっそく、きょう帰ってから新人賞をめざして書くべきです。志を高くもって」
おそれ多い芥川賞作家の忠告を、とくに私はきかなかったような気がする。ただひじょうに運がいいことに、六作目のベスト5にあげられた会員誌発表の自作が文學界へ転載されたことである。すぐさま野呂さんからハガキがきた。原文の通り写してみる。
「おめでとう。文學界へ載った感想はどうですか。作者にとって、同人誌とは異った受け取り方があるのではと考えます。」
その後、庄野音比古という文學界編集者（のち編集長）が手紙をくれたこともあり、私はどんどん原稿を書いて編集部宛送りつけた。その一本が新人賞候補に入れられた。おりもおり、福岡の講演会会場で野呂さんと再会の機会があった。
「新人賞の候補になっているんですってね」
「ええ。まぐれですよ」
「自信のほどはどうですか」
「落ちるという自信があります」
「通る人は、みんなそういいますよ」
けっきょく私の自信は証明されて、以後野呂さんとお会いすることはなかった。それから十年後、誕生日直後の入院ベッド上からのお便りを受けとったあとに、作家は四十二歳で急逝した。
野呂夫妻の離婚は、私の諫早訪問後二、三年たった頃のようである。子どもはいなかった。妻となる人との出会いは自伝風エッセイにくわしい。また、すぐれた私小説風日常短篇にも妻のことはいくつも出てくる。
〈灰がふってくる、と妻がいった〉ではじまる、病弱なつれあいが祈祷師のもとへ通う話。列車の窓ごしに飛ぶ赤トンボに病みあがりの女がついと手をのばし、〈トンボ、おいで〉と呟くシーンに、〈お前、そんな細い腕でつかまるものか〉と独白で終わる静謐の逸品。
書くに値しない生活のヤニは捨象して、この作家は書くに足るものをしっかり刻印する。野呂の純文学短篇のいくつかは精緻な螺鈿細工を思わせる。彫琢された散文であり、詩情も横溢している。物書きというより名工といってよく、本誌に喋々する必要などありはしないのである。
あのとき新人賞をとりそこねたことも与って、野呂の青春エッセイの、わけても失意・失業のくだりに目が及ぶと、とたんに血がさわぎ身をつまされる。株取引のようにあの上昇相場で売ってさえいたらと地団駄を踏むのに似た思い。チャンスをつかまない人生は地獄だ、といったのはロッキーの主人公を演じた役者だ。
最後に思い出したことを一つ。わが町の高良山から掘り取ったじねんじょを諫早へ送ったことがある。
「好物ゆえ、感激しました。ていねいな包装にも」（原文のまま）
と礼状がきた。もう新人賞のことはふれられていなかった。

略　歴

一九四七年生まれ。自営業
「文學界」「海燕」に小説を発表。
詩集『ハイエナ』『岬』
久留米市在住
詩誌「禾」同人
「道標」に「六ツ門鉱脈通信」執筆

◎諫早医師会保健文化賞おめでとうございます。先日の浜文化賞に続いての名誉ある受賞、友人のひとりとして嬉しく誇らしく思ってます。諫高美術部の先輩、後輩のご縁が今、「諫早通信」三十八号でつながっているのはもちろん野呂さんのお人柄、文章によるものですが、編集長西村さん個人の野呂文学への熱い想いが結集した結果だと私は思ってます。
私は野呂さんのエッセイが好きです。日常茶飯の普通の事が素敵な文章になってその情景を思い浮かべながら文章の力に酔いしれています。

国際ソロプチミスト諫早
北島　安子

◎「三十八号」拝受。あい変わらず次々と掲載される新しい執筆陣に驚きます。野呂さんの小説集が出版中という事ですが、いま本が売れない時に、全国に野呂ファンが多いということですね。
新聞コラム「自殺予備軍…」の不眠症、私も睡眠誘導剤のお世話にならなければ眠れないので、よくわかります。それでも彼のエッセイは深刻な事が書かれても、深刻にならないとかも知れません。「小説集成」近くの書店でとり寄せて貰うことにしました。楽しみです。十七日関西同窓会で中野章子さんの講演を拝聴します。これも亦楽しみです。
とり急ぎお礼まで。

かしこ
奈良市千代ヶ丘
（諫五回）　吉永　亞美（つぐみ）

野呂さんのまなざし
遺された写真から⑩
「荻窪」㊦

エッセイスト　乳井昌史（にゅういまさし）
（一九四四年生・東京在住）

西荻窪駅北口の古書店で南口の盛林堂書房が火曜日も開いていると教わった。小説やミステリー、山岳書などの品揃えで本好きには知られた店であり、せっかくだから足を向ける。

これはまあ、好みのはっきりした蔵書家の書庫に入ったような。天井に届きそうな書架の本の整然とした並べ方、木の床の塵もとどめぬ様子が清々しい。二百円程度の文庫本にまで半透明の紙が掛けられ、本と著者に対する敬意と愛情のほどが伝わってくる。

真っ先に、野呂邦暢の本が目に飛び込んできた。「海辺の広い庭」「丘の火」「猟銃」……十五、六冊の中に手元に置きたかったエッセイ集「古い革張椅子」もある。ウーム、野呂ファンとしては嬉しいような、買う立場としては困ったような値段。今日は外で飲まずに真っ直ぐ帰ればいいか、そう言い聞かせて自分のものにした。

土地柄、井伏鱒二があるのは当然としても、上林暁や尾崎一雄、木山捷平らの本もズラリと並んでいる。丁寧に扱われて。

眺めていると、こういう私小説作家と作品を愛した東京・大森の古本屋の主人の姿が思い浮かぶ。野呂邦暢のエッセイ「山王書房店主」などに登場する関口良雄氏。この店主の側から、野呂さんとの淡く、しかし深く心に残る交流を綴った名品「昔日の客」とを併せ読むと、興が尽きない。

「山王書房店主」は、上京して働く小説家の卵が時間と金をやりくりして古書店に通う話である。ある時、いつもは気前のよい主人が「道楽で古本屋をやっているわけではない」と激しく怒ったが、その半年後、東京を引き払う青年がどうしても欲しかった写真集を買おうとしたら、餞別だと言って大まけしてくれたという。

「昔日の客」では山王書房に「野呂邦暢です」と電話がかかり、店に出入りした昔の話をして芥川賞授賞式への出席を請う。店主は喜んで出かけたが、会場で会えずに帰った数日後、小説家が現れる。「作品集『海辺の広い庭』を下さった。その本の見返しには、達筆な墨書きで次のように書いてあった。『昔日の客より感謝をもって』野呂邦暢」。短いのにゆっくりした運びの随筆は、そう結ばれる。

本と古本屋が好きな小説家と文学が好きな古本屋の主人。双方の思いが、それぞれの文章の中でいい具合に響き合っている。

盛林堂書房の中を見回していたら、毛筆の額装があった。

〈……鼻の下が長くなったり
短かくなったり　一日が長くなったり　短かくなったり　そして
財布が少しは肥った事もあったが
その後はずーとやせたままで　先
が長いと思っていたが　だんだん
短かくなってきた〉

飄逸味のある一篇の詩は、「昔日の客」を巻末に置いた同題の随筆集にある「自画像」ではないか。どうやら、この店の若々しい主人は、伝説的な山王書房店主に私淑する人のようだ。

第四十四回 諫早医師会保健文化賞

地域文化の向上や青少年の育成に貢献した団体個人に贈る賞に野呂文学伝える季刊誌の編集長として平成二十五年十一月三日に受賞。西日本新聞社の後援もあって十一月一日付記事《諫早市を拠点に活動した芥川賞作家、野呂邦暢の作品や魅力を伝える季刊誌「諫早通信」の編集長。二〇〇四年に創刊。出版社が野呂のエッセー集などを出す契機にもなった。「野呂さんの筆力と皆様の支えに感謝します」。》

この日並行して宮本諫早市長から感謝状を戴き、西日本新聞社からは黄金の王冠と翼を広げた鷲の彫金に飾られた紫檀の楯を戴いた。㈱

ので、さすがです。

登戸　プルースト編さん室
山田美恵子

◎この度はまた、読みどころ満載の「諫早通信」を誠にありがとうございました。文学には程遠い生活の私ですがお陰様で野呂文学の魅力に身近に触れさせて頂き、毎回通信を読むたびに新たな興味・関心が湧き出します。

別府大学食物栄養科学部
学部長（諫十一回生）江﨑　一子（いちこ）

忙しい合間の立ち話によると、祖父が創業した盛林堂書房を十年ほど前に継いだ二代目。幼い頃、店に現れた井伏鱒二に「遊んでいただいた」生い立ちからして古書店主に似つかわしい。関口さんの「自画像」と題する毛筆の詩は、古本市で丸められてあったのを見つけて手に入れたそうだが、そんなエピソードからも古書店という仕事への志を感じる。

傾倒する余り、一昨年六月、「山王書房店主関口良雄と昔日の客」展を開いて盛況だった。野呂さんが関口さんに献呈したサイン入りの「海辺の広い庭」も借りて展示したという。情報に疎くて見逃した僕が、悔しそうな顔をしたせいか、展示物の資料をサッとコピーして手渡してくれた。

本を手に入れ、本にまつわる話を聞いたりしていると真っ直ぐ帰る気持ちはどこへやら、やはり一杯やりたくなる。荻窪のよさそうな酒場にふらふら吸い込まれ、半日の古本屋巡りを反芻する。

女将一人。居心地よさそうな常連たちの中の、初めての客にも分け隔てがない。若い頃に住んだ小田急沿線の駅のそばにあった酒場の空気と似ている。そこに、「天上の花」の作家の萩原葉子さんが、熱中していたモダンダンスの稽古の帰りに大きなバッグを持ってよく立ち寄った。朔太郎の娘は人見知りする人だったが、その店ではくつろいで過ごし、僕らは「葉子先生」とお呼びして親しんだ。

そう言えば、「関口良雄さんを憶う」と題する追悼文集の野呂さんの隣に、萩原さんも「うなぎの約束」という一文を寄せている。お互いに鰻をおごり合うおかしなやりとりから、関口さんとの親しさが伝わってくる。詩人の娘は、古書店主の中にある詩魂に共感するものがあったのだろう、あのはにかみ屋さんが心を開いている。

銀杏子の号を持つ山王書房店主は、加藤楸邨に師事した俳人でもある。好もしい句が多い句集の中に、二月の「諫早通信」にぴったりの句があった。〈きさらぎや古書買ふ人のしづかなる〉。その客が、野呂さんであったとしても不思議ではない気がする。

野呂さん手撮りのフォト⑩（再掲）

野呂文学基金　御協力芳名

一口一、〇〇〇円より受付順

久留　和枝　様（諫早市）
西村　房子　様 ㊞
（諫早医師会保健文化賞記念）
山田　和子　様（諫早市）
野中・奥村　様
（諫早文化協会事務局）
宮崎　継宣　様 ㊞（長崎市）
原本満里子　様 ㊞（長崎市）
中野　章子　様 ㊞（京都）
（諫高関西同窓会講演記念）
馬場　正邦　様（諫早市）

野呂文学基金は三十三号から寄贈頂き三十八号を以て延べ百二十九人の方から、百十五万四千円也を戴きました。一回の発行に印刷・送料・袋等で約十万円程かかりますので既に三十五号から支払いに充てさせて頂いています。以上御諒承下さい。

（野呂邦暢顕彰委員会）

野呂邦暢文学基金

一口一、〇〇〇円より五、〇〇〇円

（郵便局）

入　金　票

口座番号
01820-4-24915
（加入者名）
諫早文化協会

※通信欄に『野呂文学基金』とご記入下さい。

文化評論

消えてゆく地名

（作家）野呂邦暢

つつじヵ丘、柏台、百合ヵ丘、富士見台とかいう地名が、このごろむやみにふえたような気がする。

年賀状の宛名を書いているうちに気がついた。そういうところはたいてい五の十三の八の四〇五とかいう番地になっている。最後の数字は四階の五号室を意味するらしい。私が今くらしている長崎県のほぼ中央に位置する諫早の郊外にもつつじヵ丘という団地がある。東北と中国にも同じ地名があるのを知った。まだ他にもあるように思う。全国の地名を調べたわけではないが、統計的に考えられることである。

時代でいえば高度経済成長と並行して各地に住宅団地が続々と建設され始めたころ、すなわち昭和四十年代初めからの現象だろう。新しい地名が生まれ、古い地名が忘れられてゆく。

手っとり早く諫早を例にあげることにする。

私が小学生であった時分は、町はずれの丘には目代、美濃、菅牟田、などという地名があった。目代とは昔その丘に代官が居を構えていたからである。平安、鎌倉時代に国守の代理となって任国へおもむき、事務をとりあつかった役人を「もくだい」という。時代が降って代官と呼ばれるようになった。いつかそのことが忘れられ、目代が訓で読まれて「めしろ」となり、土地の名前として定着したわけである。

美濃はあるいは美野と書くのかも知れない。地図には両方とも併記してある。目代の下手にあたり、日当り良く肥えた土地でわが家の畑もこの一画にあった。菅牟田は美濃のさらに下手にあたり、丘と丘にはさまれた低湿地一帯を指し、おもに水田である。牟田とは字引によれば、草の生い茂った沼を意味するという。

とこういうふうに地名をあげてゆけばキリがない。つまり私がいいたいのは、古い地名はみな相応の由来を持っているということである。由緒があり歴史がある。ヒマ人が思いつきで命名したのではないのである。まして行政上の便宜によって命名されたこともないはずである。

私はこれらの地名を祖母の口から聞いた。いま諫早の若い人で、美濃、菅牟田という地名を知っている人は少ない。いずれも日ノ出町と改名されているからである。味もそっけもない、新建材の肌のようによよそしい名前である。

伊東静雄は明治三十九年、諫早にうまれた詩人である。私はもっかこの詩人についてしらべているのだが、彼が通学した小学校のありかがはっきりつかめないで困っている。裏町という所にあったことはわかっているのだが、その裏町がどの区画を指すか正確に決められないのである。

伊東静雄と同世代の人をたずねて訊いてみると、あの辺という答えが返ってくる。その答えが三人三様ちがっているから厄介なのである。明治末年から大正にかけての地図があれば問題は簡単なのだが、諫早に市制がしかれたのは昭和十五年で、それまでは町の地図などありはしなかった。むかしの町名は九割以上改められている。藩政時代の地図は残っていても、町並は現在それと対照のしようがない。たびかさなる洪水のせいである。

決定的な変化は昭和三十二年の大洪水である。死者の数およそ七百人、川ぞいの町はぜんぶ浸水した。わが家も流失した一軒である。私が子供のころ馴れ親しんだ町のたたずまいは、洪水の後にたてられた都市計画によって変ってしまった。道路は拡げられ舗装され、川幅も大きくなった。町が立派になったといえば反対はしないが、古い城下町の面影をのこしていたむかしの諫早だってすてたものではないと思う。

昭和五十三年三月号（二〇三号）

◎浅尾節子氏提供

編集後記

一九八〇年に四十二歳で亡くなった野呂さんは夥しい珠玉のエッセーを残している。そしてその作品を浅尾節子さんが最大洩らさず蒐集下さった。

「諫早通信」は亡くなって二十四年目の二〇〇四年に発行。浅尾さんの「珠玉」と中野章子さんの「野呂邦暢の文学世界」解説で多くの野呂文学ファンを開拓。二〇一四年の今年平成二十六年で丸十年也。昨年の文遊社の小説集成全八巻が着々と発行。そして今年は珠玉の『(仮)野呂邦暢随筆コレクション』がみすず書房で発刊される予定である。

暮れに長崎のイーズワークス社刊の豪華本「樂（らく）」を頂いた。（長崎の作家）諫早を愛した野呂邦暢と題し丁寧に取材し美しい頁にしてある。私まで輝いて写っています。

この取材の日、先天的に方角音痴の私は野呂さんの北諫早墓所の案内に手間どった。何回行っても私の東西南北は定まらないのです。

方向音痴の吾の案内にてぐるぐると
無駄を重ねつ野呂墓所へ着く
西村房子 詠

編集長 西村 房子
編集員 相庭 建次 古賀 順子 中野 章子
山下 秀人
中野 勝利
事務局長
編集部
〒八五四-〇〇一一 諫早市八天町一一-四
電話(〇九五七)二四-二六五八 FAX(〇九五七)二四-二六九三
野呂邦暢顕彰委員会（諫早市芸術文化連盟内）
〒八五四-〇〇一四 諫早市東小路町一〇-二五
電話(〇九五七)二二-一一〇三 FAX(〇九五七)二二-一一六七
印刷 諫早印刷㈱
〒八五四-〇〇〇一 諫早市福田町二〇-二六
電話(〇九五七)二二-一三五〇 FAX(〇九五七)二二-一三五一
季刊「諫早通信」は二月・五月・八月・十一月に発行します。
「諫早通信」は諫早図書館・西諫早図書館・長崎図書館・森山・たらみ各図書館・市民センター・芸術文化連盟・山下画廊等に有ります。
「諫早通信」無料